

戸板康二

toita yasuji

丸本
歌人
舞伎

講談社文芸文庫
Kōdansha Bungei bunko



丸本歌舞伎

常州大学图书馆
藏书章

講談社 文芸文庫

まるほんかぶき
丸本歌舞伎

といたやすじ
戸板康二

二〇一一年一〇月七日第一刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2・12・21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395・3513

販売部 (03) 5395・5817

業務部 (03) 5395・3615

デザイン——菊地信義

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

本文データ制作——講談社デジタル製作部

©Toyoko Toita 2011. Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。



講談社文庫

ISBN978-4-06-290138-3

目次

丸本歌舞伎研究

七

丸本歌舞伎鑑賞

七九

「義経千本桜」

八一

「傾城反魂香」

一〇一

「平家女護島」

一一〇

「義経腰越状」

一二八

「妹背山婦女庭訓」

一三七

「本朝廿四孝」

一四一

「彦山権現誓助劍」

一五一

「新薄雪物語」

一六一

「仮名手本忠臣蔵」

一八五

「菅原伝授手習鑑」

二二四

【参考資料】単行本あとがき

二二三

解説

渡辺保

二三四

年譜

犬丸治

二五〇

著書目録

犬丸治

二六八

丸本歌舞伎

toita yasuji
戸板康二

講談社  文芸文庫

目次

丸本歌舞伎研究

七

丸本歌舞伎鑑賞

七九

「義経千本桜」

八一

「傾城反魂香」

一〇一

「平家女護島」

一一〇

「義経腰越状」

一二八

「妹背山婦女庭訓」

一三七

「本朝廿四孝」

一四一

「彦山権現誓助劍」

一五一

「新薄雪物語」

一六一

「仮名手本忠臣蔵」

一八五

「菅原伝授手習鑑」

二二四

【参考資料】単行本あとがき

二二三

解説

渡辺保

二三四

年譜

犬丸治

二五〇

著書目録

犬丸治

二六八

丸本歌舞伎

丸本歌舞伎研究

1

歌舞伎の上演種目の上で、現在最も重要な地位を占めているのは、人形に書き下された浄瑠璃を原拠とした脚本である。それは俗に「丸本物」とよばれているが、芝居道の独参湯どくじんとうという言葉さえある「忠臣蔵」をはじめ、「寺子屋」も「千本桜」も、みな、そのうちに含まれる。

一方、歌舞伎プロパー（独自）のものは、歌舞伎十八番、舞踊、南北・黙阿弥等を除いては、稀にしか上演されなくなっている。（その十八番すら、実は古い資料を近年綴り合せたもので、それが初演当時の倂をのこしていると思うのは、空想である）そんなわけで、今日、歌舞伎という場合、人々は、歌舞伎プロパーのものよりも、むしろ——「丸本物」の方を思い浮べる程になっている。

しからば、なぜ、歌舞伎に、人形浄瑠璃の影響がこうまで大きく蔽っているのであるう。

それに対する答としては、歌舞伎の特色が現在ではむしろこの方に濃く出ているからだ
と、筆者は、今の場合いう以外にない。つまり、源をたずねれば、人形芝居の手摺にかか
ったものであるが、一たび、歌舞伎がとり入れ、人間が演じて以後、ここに新しい性格
の、演劇が生れたのだ。そして、演出様式として、最もすぐれ且つ面白い技巧が、俳優の
工風によって創作されたのだ。だから、永い年月の間に淘汰されて行つた無数の演目をよ
そに、今日まで残存するだけの生命力が、「丸本物」の方に、より多くあつたのは、不思
議でも何でもないことであつた。

筆者はこれらの一連の狂言を、「丸本歌舞伎」という言葉で以後呼ぶことにする。

従来、今ここに「丸本歌舞伎」と称するものを、何と呼んでいたかといえは

A、竹本劇たけもとげき（帝国劇場がつかい初めた言葉である。「竹本劇と其作家」という岡本綺堂
氏の書物もある）

B、義太夫狂言（日本戯曲全集は、「義太夫狂言時代物集」「義太夫狂言世話物集」とい
う文字を使った。この全集の編纂者渥美清太郎氏が、便宜上使つた言葉である）

C、でんでん物（俗称。デンデンは勿論、義太夫の三味線の音である。これは、擬音語
を以て、いわゆるチョボが使用されるこの種の狂言の汎称としたので、実感はある
が、学問的な言葉にはならない）

D、丸本物（一に院本物とかく。院本は中国の言葉で、戯曲・脚本を意味し、あて字と

して、丸本の訓をそのままあてたのはおかしい。丸本の語原は、全曲を丸ごかしに出版したためというのだが、これもあてにはならぬ。

等であるが、筆者は、新しい

「丸本歌舞伎」

という言葉で呼ぶことにする。

2

丸本歌舞伎の明確な記録は、近松門左衛門の「国性爺合戦」を嚆矢とする。(その前に「待夜小室節」「天神記」等を歌舞伎で上演したことは分っているが、詳細は明かでない。)「国性爺合戦」は正徳五年十一月に書き下され、竹本座空前の大当りで、十七箇月の長期興行を行った。これが歌舞伎劇壇を非常に刺戟し、翌享保元年秋には京の都万太夫座で、翌々享保二年三月には大坂の嵐大三郎座・荻野八重桐座で、同じく二年五月には江戸の中村座・市村座で、直ちに「国性爺」を上演したのである。しかも、どの興行も極めて好成績だったという事によって、歌舞伎の中に人形芝居の系統の脚本が導入される口火となったが、同時に、それからは、歌舞伎劇の幅は二倍に拡る結果となった。なぜならば、人形の演目(特に好評な演目)は直ちにそれを取り入れる習慣がついたからである。即ち、浄

瑠璃作者にとって、この時以後、浄瑠璃をかくということがとりも直さず、間接に歌舞伎の台本をかくことでもあったのだ。

黙々と作者の意のままに右でも左でも向く人形は、作者にとって、気楽な相手だった。この対象の前に、拘束されることなく、作者の構想は、自由に働いた。だから、人形浄瑠璃には、奇想天外な趣向・広大な気宇が見られる。——歌舞伎は、その原作の、一部分、きわめてとり入れやすい部分のみを輸入したのだ。しかし追々、浄瑠璃作者も、歌舞伎の演技術を意識し、むしろ歌舞伎的な浄瑠璃を書くようになった。かくして、漸次、歌舞伎の内容は豊富になり、歌舞伎の性格は変って行ったのだ。

丸本歌舞伎は、こういう経路をへて、歌舞伎の主流を占めるに到ったのである。

3

しかし、現在は、丸本歌舞伎も亦、歌舞伎の他の面と同じく、演目はかなり少なくなつて来ている。

勿論、戦争中、戦争直後、現在と、それぞれの時代に対応して、演目にも消長があったが、その波の起伏の漸くおさまった今日、丸本歌舞伎の中で、残存しているもの（上演可能なもの）を整理すれば大体次の通りである。